



さすがイチゴ農家さん

ジャムの味が濃厚でした♪



▲自家製アイスにジャムやソースをたっぷり♪



高知に来てから3年ほど農地を探し人を頼った耕治さん。そういった種まきが実を結ぶまでの経緯を聞くと、同じ移住者、しかも地域おこし協力隊として3年の任期

広報委員の感想②

取材のとき食べたイチゴアイス最高においしかったです。

稲やかな感じのご夫婦でした。高知へ移住して色々ご苦労もあったでしょうが、南国市は、環境が良く、静かで高速インターや空港が近くて最高の場所だと仰っていました。

広報委員の感想①

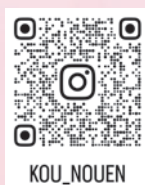
今後は、イベントにも出店したいと思っています。



▲キャンプの雰囲気を楽しみました

広報委員の感想③

イチゴ栽培を始めて10年、まだまだ分からないことがいっぱいあるようで、試行錯誤の連続だそうです。私も家庭菜園をしています、ハウスの規模が大きいので、大変だろうなと思いました。静かな環境の比江での生活が気に入っているとのこと良かったです。



▲Instagram



2009年に高知に移住し、南国市比江でイチゴ栽培を始め、今年3月にイチゴスイーツ販売所「耕農園」をオープンした川崎耕治さん・聖子さんご夫妻を訪ねました。

FILE 2 耕農園 取材レポート

阪のスーパーマーケットに就職。その後2009年に高知市の野菜のインターネット販売の会社に転職し、大阪から高知市に移住することになりました。

一方聖子さんは農業大学卒業後、島根県の造園会社に就職しました。仕事が思ったよりハードだったため退職し、知り合いの牧場のパン屋の手伝いをしたりしていました。耕治さんとは大学卒業後も島根と大阪の遠距離交際が続いていましたが、耕治さんが再就職先として高知を選んだことから、結婚と高知への移住を決意。当初は高知市内に住居を構え、高知市のパン屋で働くことになりました。

イチゴ農家になるまで

2009年、耕治さんは高知で会社員として働きながら地道に農地を探しました。とにかくいろんな人に農業をやりたいと伝えて回ったと言います。そしてついに3年目、運命の出会いが：

『農地を縮小したい人がおる』と聞いて今の場所の話をもらいました。それがイチゴ農家やったんです。でも僕は高知の農家というトマトとかニラとかショウガをイメージしてたんで、『イチゴかあ…』みたいな感じで。イチゴと聞いて当初はそんなに乗り気ではなかったと語る耕治さん。『ところがハウスを見に来たら綺麗やったんですよ。しかもビニールハウスも設備とかもそのまま使ってくれて、値段を聞いたらあまりにも安くて。え、そんな安く農業始めていいの？』と半信半疑でした。

実は昔、耕農園のある地域一帯にはイチゴ農家が十数件あったと言います。ところが農家の高齢化や、イチゴ栽培の不安定さも相まって、現在この地域のイチゴ農家は



限られた数件のみになってしまったようです。

イチゴ栽培には大敵である「炭疽（たんそ）病」との戦いが付きもの。親株から伸びるランナーから子株、孫株…と増やすイチゴにとって、親株がこの病気にかかってしまつとハウス全体のイチゴが全滅の危機に瀕します。

「イチゴはそういうばくち性の高い品目なので、周囲からは『よう選んだね』と言われました。」と耕治さんは当時を振り返ります。

「経験もないし、元の持ち主の農家さんに1年間研修させてもらいました。知り合いのツテで、福岡のイチゴ農園にも見学に行きましたね。そうして営農を開始するのは2014年です。」

「僕の場合はもう2、3年やってるはずなんです」と笑う耕治さんからは、この十数年がいかにあつたという間だったかわってきます。

イチゴスイーツの販売へ

規模を縮小したいという農家さんとの出会いから10年。1年間同農園で研修させてもらい、その後『紅ほっぺ』の栽培を始めました。当初、収穫のときは夫婦2人では寝る時間もないほどの忙しさでした。これでは長く続けられない。長く続けるにはどうしたらよいのか？

- ①人を雇うことにする
- ②そうすると広い作業場が要る
- ③自分で売りたい
- ④夏場の仕事を確保することで雇用が安定できる

すぐにやりたかったけれど大工さんの都合で着工できず、販売の方は、保健所の許可が下りず：

令和5年3月1日、お店が建つたのと許可が下りたのがちょうど重なり、オープンすることができました。テレビの取材があったり、生イチゴのパフェがインスタにアップされて、周辺の道が渋滞するほどの反響がありました。



★Wayfarer Brewing Company

●国府小学校

耕農園★

●古今集の庭

南国インター線

●南国国分簡易郵便局

―総評―

国府地区といえは千年以上前は高知の中心地で、現在の県庁にあたる国庁があった場所として知られています。

往時は都からの人々と地元民が行き交う栄えた場所だったのでしたが、現在ではそれらを偲ばせる史跡が点在するとても静かで落ち着いた地区となっています。

今回お会いした2組の移住者の方からは、たくさん移住先の候補の中から南国市の国府地区を選び、さまざまな困難に直面しながらも新しく事業を始めたこととお聞きすることができました。2組とも移住のきっかけはそれぞれ違いますが、南国市で夢を叶えるためにチャレンジしている様子を取材できたことを一市民としてとても嬉しく思いました。

全国的に少子化や高齢化など難しい問題をどの市町村も抱えています、より魅力ある南国市を創ることで、たくさんの方が交流できる市になると改めて取材を通して思いました。